〔昔々物語〕一むかしは往來する侍衆、上下著或は袴計にても、大方股立取、歩行馬上の人も股立にて乘、かきの三尺手拭はち巻して往還する有し、今はなし、

〔嬉遊笑覽二上服飾〕鉢巻は男女ともにふるきふり也、田舍の女は木綿の單なる物を帶したる上に著、鉢巻するを禮服とす、今も武州近在また下總邊にて婚姻など賀祝の事ある時は、其家また親族の婦はつせといふ歌をうたふに、その體なり、（中略）むかし、女は膏澤を用ること少なければ髮亂れ易き故、包みもし鉢巻もせしなり、道三の養生物語に夜いぬるには頭巾は毒なり、鉢巻よしとあり、昔人は髮に油けすくなきゆゑ髮亂れれば、いぬるもかやうのことあり、今駕籠かく者に、手綱染のやうなる布をたゝみて插むは鉢巻せむ料の手巾なり、乙州がそれ〳〵草に、六尺は鉢巻に懷をあづけ、鎗持は髭を是とすといへり、鉢巻とあらず、頭に桶の箍かけたるやうに、手巾をたゝみて結ぶのみには頭を包むはみな鉢巻なり、古畫には六尺の鉢巻種々の形あり、又神佛に詣る行人の頭つゝむも手巾なり、

〔落穗集九〕酉の年（三〇明年曆）大火の事

掃部守殿（伊井）には澀手拭の鉢巻にて、（略）（中）因幡守殿（野淺）へ御向被成、只今は不輕大火に其元は、何方へ御越候哉と有之に付、（略）（中）御機嫌相伺申度奉存罷出候と返答被申ければ、（略）（下）

〔我衣〕三尺帽子トテ、木綿ニテ、頰カムリニシ、又帶ニモ用ユ、古ヘヨリ有リ、後ニ麻ニテ色々ノモヤウ染タルヲ、三尺手拭ト云、元祿ヨリ五尺手拭ニナル、今ノ腰帶コレナリ、

〔嬉遊笑覽二上服飾〕今は三尺手拭といふもの旅客の腰帶とし、また賤者のひとへ帶となるのみなり、昔も武家の小者など布のゑごきたるを帶とするさま、古畫に見えたり、是も手巾なるべし、

〔秋齋閒語三〕帶刀人常服にて主用に出る時、前ニ長手ぬぐひをはさむ事は、平服の時の相印也、夫故元來は其家々の染色を極め置、其家中は一統すべき事也、あるひは何の守組家中は何色々々と可極也、甲冑にては勿論火事羽織にても、家々の相印ありて知れよし、平服の時途中などにて不時に事起りし時、人數見分る爲なり、それを今は取ちがへて、いろ〳〵の銘々の物好、出來合の